



里見八犬傳 拾八編 四十七下



709
99



門連 13
 籍 709
 卷 99



明治三十八年
 十月九日
 購求

九輯四十七下

然ハ這時下總葛飾多國府臺の城より見安房太郎義通朝臣より從軍の執事東
 六郎辰相杉倉武者助貞元田稅方助逸友繼橋綿四郎喬梁真間井樞二郎秋李潤鷲
 手古内美容振照俱教弘經あり。就中這隊の防禦使大塚信乃成孝と大飼現八信
 道是之又行徳ヨリ今井の柵少の兩防禦使大川壯介義任大田小文吾悌順あり。其隊
 の頭人滿呂須五郎重時肩持儀杖朝經大樟村主俊故滿呂再太郎信重安西就介景重
 あり。武藏石濱の城より登桐山八郎良子あり。同國五子子の城より軍師大坂毛野胤智あり。其
 隊の頭人浦安助友勝十代丸圖書助豊俊小湊あり。又小水門目堅宗等是亦從之勇婦音音及
 妙真曳子單節即範内葉四郎撥岡後八亦這隊亦在り。又大塚の城より小森但一郎高
 宗木曾三助李元あり。又忍岡の城より防禦使犬山道節忠與あり。其隊の頭人印東小六
 明相荒川太郎清英等是亦從之按之武藏忍岡と唱る地方之所あり。古歌の詠る
 忍岡の即多摩郡小忍川又玉川小遠かむ。又不忍の池の前面湯島の稍盡の出寄

八代傳九再卷四十六

十七

文藝堂藏

をも不忍の名小對とく。あをも俗小忍岡といひ二名向岡是之。あ々俗稱をぞ知る。一問詰
休題又穂北の壯火落點餘之七有種犬山が加勢五百名を領てあ不在り。又相模る新
井の城も防禦使大村太用礼儀あり。臨時追加の頭人田税戸賀九郎逸時。古屋八郎景
能是小従ふ又鎌倉の堀内雜魚太郎貞住あり。安房の洲崎の本陣火防禦使大親兵衛
仁あり。政木大全孝嗣。姥雲代四郎與保東峰。崩三春高。鱗船員六郎。敏足須利。檀五郎
有數三四的寄舎五郎團平。天津九三四郎員明。磯崎増松有親。真塚紀三。漕地喜助太
等是亦従ふ石龜次團太。越郷三。萱野の阿弥七。椿村の隆八。亦這隊不在り。益將義成
朝臣の大敵敗績の後。大江親兵衛が姥雲代四郎等と俱小京師より入り來り。葛西の
閉戦小軍功あり。政木孝嗣門の勇士伴當十數名を將て。昨日洲崎の陣營小参り。久
義成主八仁。京師不在り。一日の奇談及葛西行徳口の閉戦の顛末。之詳小少知
了。或の驚愕。或のち笑れ。賞感持小浅く。政木孝嗣以下。姥雲代四郎及新

参り。戦功あり者皆見参を饒さ。其忠其義を譽言せ。中孝嗣次團。在り。裏小
素藤對治の日の戦功あり。且孝嗣が忠孝する。豫聞召所之。今より。天壽と俱小當家の
股肱と。と名刀一を賜りける。堀内貞行執達あり。且貞行の親兵衛代四郎。小妙真音。音
手單節が五十子の城。奇功あり。多毛野が注進の趣を告知せると。甲乙の會話を真小
せん。爾々。と細小過。言省て漏多。看官是を查す。是より先小東峰春高
鱗船敏足。少軍師大坂の密策。小より。情地小捕て。まのせ。行徳口寄隊の敵將。谷朝
良と。腹大。刀自の代軍。稻戸津衛由充あり。又大村太角。小虜ふと。まのせ。敵將三浦義
同義武あり。義成是を陣中。小留め。船。稻村の城。遣。次。磨。小預け。る。あ。れ。も。凶。徒。を。と
見。る。る。賓。客。の。礼。厚。と。目。毎。の。款。待。浅。く。親。兵。衛。が。次。り。ま。の。せ。上。か。他。を。洲。崎。の。守。將。小
志。て。義。成。の。貞。行。を。將。小。稻。村。へ。還。り。の。ひ。け。り。孝。嗣。與。保。以。下。の。輩。皆。親。兵。衛。小。従。ふ。小。開。が
儘。洲。崎。小。在。陣。と。仁。と。小。嚮。小。國。府。臺。より。使。价。を。ま。の。せ。時。風。小。瀧。田。の。城。へ。ま。の。せ。

義実老候歎び大なるを疾見まわく思ひも猶陣中に在るを時々食餌服を賜ふ其徒然を訪せりけり左右を程今茲も將暮んと云ふ水陸所の大敵同日小威敗北の後出頭定野る沼田の城小在り長尾景春白井の城小在り扇谷定正武藏國入間郡河鯉の城小在り俱小再戰の勢も諸侯離叛を起す者多と云えり義成主則下知と今封内不在陣に要るべしと國府臺及行徳口諸將を皆召返さるる然義通君大塚信方大飼現八東六郎杉倉武者助由税力助等と俱小生拘の敵將成氏憲房朝寧為景并小齋藤盛実等を領て稻村小凱陣を國府臺の城小真間井樅二郎継橋綿四郎潤就島手古内振照俱教二宮ありて故の如くを成まり又今井の柵小大川莊介大甲小文吾是を破却と満呂須五郎孝安西就介大樟村主盾持兼杖等と俱小生口自亂憲重胤久を領て亦是稻村小凱陣を總兵一萬五千名騎馬武者歩兵列を正と甲冑華麗小齋々々といふ者なり

夫れども生拘の人々皆是宛家なる貴介公子二城の主將之囚徒をのてと云ふとと猛可小數間の房屋を造立て其第一の房小成氏第二憲房第三朝寧第四自亂第五為景の房と又憲重胤久盛実各其主憲房朝寧自亂為景同居せず屏居の徒然を慰むるをわえり又義同と義武天井を隔る別室置る唯朝良と由充の客房小在らせり宛放免の如く宛歎待も亦重なりこの時大江親兵衛們小咸洲崎より返ると那里より遠見の士卒二百名を置れり義通以下防禦使諸頭人凱陣の次の目小皆召集合見義成則正廳小對面あり西茶片余の礼を行きて這面の軍功を賞せり此川清澄堀内貞行も這席小を與りけり當義成主の家老一老臣堀五太士大塚信方を身邊近く召させ各小思ふなり這回生口の人々皆是貴人城主我焉を慢侮せん昔源平の闘戦小平二位重衡生拘れて鎌倉小囚置れ時頼朝對面と其不幸を慰むるの義の其後宗盛虜めると鎌倉小呈送され時頼朝是と對面

せむ他ハ則大臣も既に解官の罪人。是時當て頼朝の冠位昇進をねぐ抑平家の
 源氏の為め是累世の冤家。上二人後白の奉為。是驕僭の乱賊。今他を例
 とまづか。我今主客の美ふりて對面を名。せざるべや。各意見す。欲いふを
 と問。大冢阿とむり。み。唾み答るる。け。姑且と大塚信乃。辰相清澄。貞行等。會
 釋と。主小向ひて。合る。諸老の御業を等。と。合まる。鳥詩。最憚り。と。中
 愚意を。と。稟上。君今那敵將達。御對面の二條。実。寛仁。大度。博愛。至極。と。い
 へ。と。和を講。と。他。對面。他。恥。人。愛。心
 を。互。辱。事。宜。親。衛。の。議。を。好。現。成。孝。が
 意見も。愚意も。相同。那人々。御仁心。感服の後。と。御對面。ま。や。と。義。成。つ。ら
 貞行。辰相。清澄。及。莊介。現。小。文。吾。も。大家。是。從。と。答。け。義。成。つ。ら
 う。ち。所。今。成。孝。が。意見。依。衆。譏。恠。地。と。權。且。對。面。の。美。を。昔。朝。の。起。臥。三。の

饗饌。何と。心を用ひて。我恠。不客を愛。誠心を。就中。稻。由。充。の
 其心。賢良。且。人を知。莊介。小。文。吾。受。舊。因。の。故。不
 他。を。虜。不。を。服。大。刀。目。の。外。孫。朝。良。の。生。拘。他。必。忠。美。の。為。死
 ざる。と。を。亂。智。豫。計。る。所。わ。を。春。高。敏。足。と。他。を。俱。不
 捕。奇。因。て。莊。介。小。文。吾。を。朝。良。由。充。の。為。小。東。道。と。其。の。意。を。宜。と。し。這。餘
 の。信。言。遺。も。仰。され。大。家。俱。不。言。兼。と。先。這。廳。果。小。多。恠。而。又。義。成。去。
 大。川。莊。介。大。田。小。文。吾。と。滿。呂。復。五。郎。再。太。郎。安。西。就。介。磯。崎。增。松。等。を。召。と。復
 五。郎。願。ひ。の。ま。み。滿。呂。再。太。郎。を。養。嗣。と。し。又。安。西。就。介。磯。崎。增。松。に。倚。總
 角。ふ。と。這。回。の。軍。功。諸。勇。士。と。拮。抗。を。其。亡。親。の。靈。の。致。所。歎。寔。奇。と。と
 の。い。べ。を。當。家。譜。第。の。家。臣。と。し。増。松。の。乳。名。の。い。ま。実。名。を。死。み
 わ。と。他。の。阿。弥。七。と。い。実。父。あり。又。南。弥。六。と。い。義。父。あり。人。の。篤。實。人。の。義。烈。這。親

今さふ犬川大田が報恩徳義毛野が智計を感嘆々々心程恥く思ひなり。又由充朝
良のころび憲房朝益成氏自胤以下の敗將憲重胤久盛實等ハ市之境勇萬夫を
物とせざり。義同も義武も里見君臣の款待厚く仁ふと且しわ誠誠意感服と
先非を悔ざる者も多し為小貌を更めて俱小歸降の心わり。定正が賢者を媚嫉し
名の軍を起せしを恨しとの思ひけり。恁而新の幸立ちりて文明士年み做り春貴も
賤たも某の礼某の式と壽祝の事敏く送ふ父加て益を薦める意。光陰の過る覺む
日影遅々々早晩の暖く野邊の柴鶴鶴軒端よ来鳴く梅の成盛も惜過り。左右を程ふ
二月のぬ有百五十子の城あり。大阪毛野が使の雜兵西三名快船ふち乗り之洲崎米
着し稻村の城に詣り毛野が意見一通を呈上と義成則在城の五大士大田大塚大を召
聚へ其書を親兵衛不讀せしむるも毛野が意見道く巨胤智既八百人の計書を
し水か數千の敵船を燒盡し亦義兄弟等陸小數萬の敵兵を斫り之房總

三州を泰山の安の置り。果重我仁君の御本意をえ。実小己とていぎの。時今仲
春申。且時正小向とを時兵晝夜等分の美めて佛説ふあ七ヶ日を彼岸とい彼岸の
西方浄土此岸ハ則波瀾あ中流ハ是煩惱之是を念念佛者流の日小千之真福を
修する時ハ則死人成佛の便りとを伏請。大師父課く自他戰没數萬の志の急
水陸の施餓饑を修行せめ且年来の軍役の疲勞を他方の窮民馬兒們小米錢
多く取せめ。仁政正小死を起して且枯骨及ぶとの。武藏相摸新井五十子大塚
忍岡這諸城の軍用の為小敵の積貯へる米錢其の是併民の膏腴を絞りとる
者也宜く是を彼施行小充べ。時失ふべ。臣胤智悲泣哀悼の至堪誠惶
誠惶死罪死罪謹言とを書りけ。義成是をもち受て汝等との諷をいふ思ふと回れ
五大士阿とをかり小頭を低する开が中み信乃先登をまらまら其義ハ臣等も豫て
心つていばうち譚ひの。那珍客の款待小暇をいそぐはの。稟上りたとい

莊介小文吾現八親兵衛も共侶の毛野が意見始り。思ひ量りし所いふ師父を召寄
 り仰合せせむかと異同様請ひし義成怒ると黙頭へ。开々我夙意も相同じ。
 大に去歳の十月那奇風功成り。後毛野が使と共侶洲崎へ。次り糸あが開が儘延
 命寺へ退りてせむ来む。單方丈の屏居て口請經の聲を絶む。人ぬ逢むとせえり
 遊莫是等の好事を告る。飲く参る。我今手書を遣て召寄て這意をいせん。
 然いし使者を走らせく。大を召せしひり。憊而次の日。大法師の二僕をの従へ。稍
 村の城の末よけまの義成則五太士を召合せ。件の一義及ぬと。大を果と稟
 申。那四の劇策の臣僧始り。好とせむ云と論と推辭と。毛野太用が口車載とあよ
 る死罪惡を醸させり。老る小今罪障懺悔の為ふと。眞福を修させぬ。兄弟之盾を
 賣る小似たり。人を殺むを不仁と知らば始り殺さむ。好事をせざる小志く。然れども
 今小至りての經典供養の力を借らば。何をぬと。無數と無量の冤鬼を濟度做を擬や

況窮民馬兒們の米錢施行の經を讀て死を吊ふ小猶勝まり。速小御沙汰わて
 あるべとぞ。合へる。當下信乃がの。師父今番施餓餓の導師小做りぬ。伏姫小
 御紀も那水明の數珠をそ必用いぬ。へけれ其記數の八箇の玉を。我感得をり。より
 今小至りて返まつ。む。兄弟等全聚ふ。當家小仕なる上。必本小返も。東西南を
 以け。と。親兵衛莊介小文吾現も共侶の件の數珠の役行者の伏姫小授。授
 靈宝物ぬ。然ら。今番の大好事。小一百八玉具足。其功徳をぬ。那冤鬼を鎮。鎮
 足りぬ。と。議するを。大い。あむ。否と。今番の和殿の感。の玉。我借る。及む。最も
 不測の。の。館。の。召。な。累。の。臣。僧。谷。山。の。奇。風。を。發。る。瘡。襲。の。玉。囊。小。藏
 め。懐。ぬ。寺。小。還。り。と。取。出。て。見。け。る。小。怪。む。件。の。玉。の。毛。皮。自然。と。裂。破。れ。内。小。八。箇。の。白。玉
 わり。ち。驚。た。會。抗。見。る。小。亦。是。其。玉。每。小。自然。と。頭。れ。八。箇。の。文字。わ。の。奇。れ。の。玉
 づ。も。わ。ね。件。の。玉。を。用。ひ。と。も。合。せ。讀。見。る。小。正。に。是。阿。耨。多。羅。三。藐。三。菩。提。讀。見

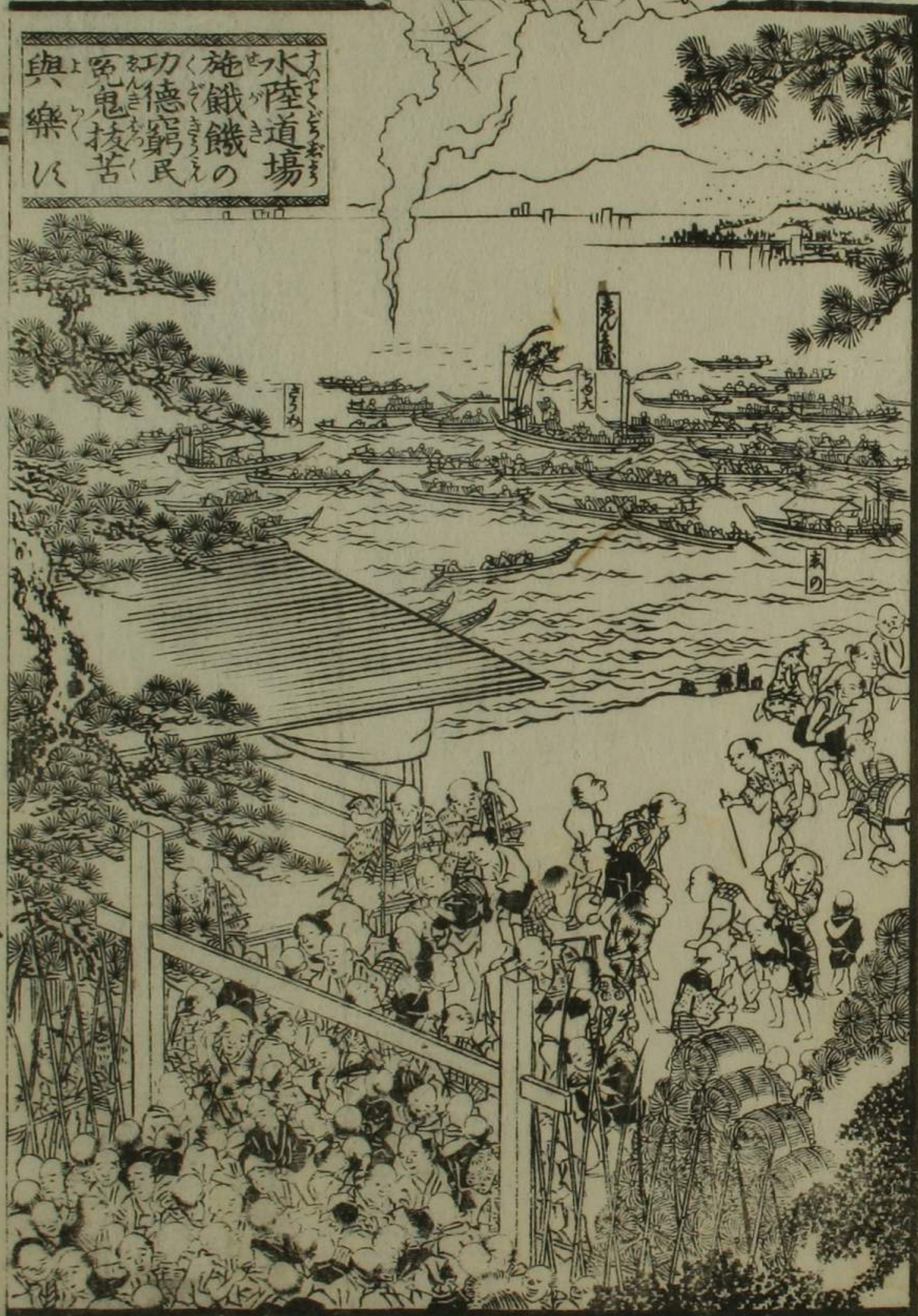
但三字の玉の箇を先多羅の下貌の上の措て是を三貌と讀み又菩提の上の措更て三菩提と讀べ。有徳は一字兩用して九言をも八玉にて足れり。按ずる小瑯瑯代醉篇の阿耨多羅三藐三菩提を等見の義と注し三藐三菩提を成正覺とて是則等正覺を成を見の義ゆ。正覺を菩提とて又一説の阿耨多羅三藐三菩提は佛の所謂仁小同ト人至仁の時必是正覺を成して菩提に至らざる者なり。譬の玉子の君仁は不仁の君義は不義なりとの如し人の一身五臟の神君至仁の玉子の脚の是を資する者敢不仁を傲してわづむ。是を阿耨多羅三藐三菩提といふ。是は由之を觀れば八丈士の感の志する。那仁義八行の八の玉の人間所要の至宝なり。死を吊ひ滅を濟す佛會の相心くべ。故不易る。この玉をの今番の所用の傲さるるは是の亦役行者の善巧方便のべ。死欲佛法不可思議廣大之量奇々玄妙のいふや。と言詳小説示る。件の玉を識數不串たると。水晶の數珠を取て見せまれば。義成主を首と信

乃親兵衛莊介小文吾。現も共侶の其事を听其奇の感とて耳を傾け目を注し稱賛聲を齊く。開の中の信乃のいふ。師父阿耨多羅の注釋は實は是精妙なり。雅俗の惑ひを醒まふ足れり。昔後醍醐天皇叡山小行李の折津守國香の歌不契りわづむ。山も見つ阿耨多羅三藐三菩提のたねを植けん。とてけるを太平記第二の卷載す。意ふ小國香は阿耨多羅を口正覺を成との義とて見方け國香を今も世にせむ。師父の諺解をせざるべ。他其是を何といへん。との親兵衛莊介も寔は然り。と應り。義成の見渡す。數珠を受合りうち戴た。現小文吾と共侶の識數の玉を見て齊いの感歎も當下義成主は。大に向ひて現小那羅龍の玉も。邪物のより。那奇風を發す。至るまで我を幫助て大敵を斃し退ける大功あり。其後。小玉と變とて。奇特を示す。今番施餓餓の發願の佛意は稱ふ祥あり。先このよを老毎示して。施行をいふべ。仰小信乃等。然るに。然而辰相清澄と直見。後友

孝嗣たかひらは同席どうせきに召聚めいしゆす。事こと倭やまとと信まことふまこと大家たいか其その奇き不ふ敬けい驚おどろ嘆なげくなげ施行せぎやうの事こと稱せう譽ぎよを
當あた下した義成ぎせい又また課かせらるせらる軍師ぐんし胤智いんちの意見いけん由よし今いま番ばん施行せぎやうの米錢まいせん皆みな敵城てきじやうに送おくり
則すなは是これをのくく其所そのよ用よう充ちゆうてんと請こ稟らうす。然しかれども我われ今いま作さ善ぜんを行おふふ及まびびて只敵てきの東西とうせい
をのくく執しやくて其所そのよ用よう充ちゆうてんと盾たもとをか賣うふふ似にて是人ひとの財さいをのくく是これを人の施せと己が徳とくと
做おささ不ふ同どう也なり我われ亦また這こ回かいの軍用ぐんよう貯たくわえる米錢まいせん多おほくく則すなは甲かと乙とをととと施行せぎやうの所用しゆよう做お
時ときは是自これ他た平へい等とう利益りやくの義ぎをのくく真まことの施行せぎやうといひべべい水みづの則船ふねを浮めて衆徒しゆと讀よ經きやうと高敵てき
冤鬼えんきを濟し陸の則施行せぎやうして窮民きゆうみんを救ふべ法會ほふかいの則大おほをのくく導師だうしたまめんのいふ
ままのいわぶ施行せぎやうと則毛野もうの大用たいよう道節だうせつ高宗かうそう李元良りげんりやう等とう課かて約莫もく鎌倉かまがらより石濱はま
ままで武相さうる海邊へんに彼岸がん七箇目しちかんとく是これを做ます又また下した總そうの滿呂りよ復ふ五ご郎らう真間まゐま井い掘く二に郎らう
其その人ひとたままま行ぎやう徳とく本ほん所しよへも小文せうぶん吾われ國くに府ふ臺たい葛か西せいの現八はち俱く不ふ施行せぎやうの頭人かみひととと士卒しそく放はな

いいちち那な地ちに造りて重おも時とき秋あき李り管くわんの指揮します又また船ふね施せ餓が餓がの頭人かみひとの親兵衛おんべゐ信のぶ乃なり壯さか介け
たままま政せい木ま大だい全ぜん杉すぎ倉くら武ぶ者しや助すけ田でん税ぜい力りき助すけを副とせん這議ぎを夙く毛野もうの大用たいよう道節だうせつ等とう使しふ
をく安房あはら上かみ總そう下した總そうる僧俗ぶつ小せう狗くわう知ちを下す大の箇様やうと言訂てい寧ねい不ふ課かれた大家たいかと
とく言こと兼かねてまの目の衆議しの果みけり却説せつ當たう日にちの隨不ふ房ぼう總そうる諸山しやん諸しよ寺じの長老らう
道徳だうとく施せ餓が餓がの法會ほふかいを帮助すけす之各おの徒と弟ていを徒と延命めい寺じに未會かいし又各おの房ぼう總そうのこ
るも武ぶ藏ざう相さう摸もる老僧らうそう智ち識しも皆ののを佛と俱不ふ感かん悦えつせまいる各おの安房あはらを推
渡わたり来て法會ほふかいに與らまく欲さる者もの百ひやくをのくく計けいふべ大おほ則すなは其その徳とくを推を試て後を課る
各おの各おの差さありよの時信のぶ乃なり親兵衛おんべゐ壯さか介けの孝嗣たかひら直ちやく元げん逸いつ友ゆう等とうと俱不ふ洲崎しゆさきの浦に施餓
餓が船ふね百ひやく十じゆ數すう艘そうを相浮うめて件けんの大衆しゆしゆを分ち載せ其中ちゆう央やうの巨船きゆうせんの大法ほふ師し香かう
深ふかの法衣ほふえの烏輪りん子しの袈裟せさ被ひて多小せう白はく毛もうの拂子ふきを合はれる打扮だんぱん華け美びるねども眉まゆ
秀ひで鼻び阜ふ面めん色しき威いわりて猛ららど死達たつ磨まの後身み秋あきと思ふ可の骨相こつさう不ふ衆しゆしゆ僧そう都との敬

水陸道場
施餓の
徳窮民
功徳枝
鬼苦
與樂



水陸道場

二十六

大坂堂上成



水陸道場

大坂堂上成

服之相讓らざる者ぞる後方ふの沙跡念成喝食行童多爐を執り如意を執りて相立者
 三四名讀經の僧二百名左右二側小排列る船毎小幔幕舷帷を引渡して船頭小送り建
 てる餓餓架あり過去七佛の名號及涅槃偈四句の幡を八隅小建て三東萬靈の位牌
 あり種々の供物小至りて細小名状まぐりびかくの如に施餓餓船二百零八艘又伴船あり
 齋船あり三三びの食膳を嘗る者是小従ふ又信乃親兵衛壯介并小政木孝嗣杉倉直亮
 田税逸友等身甲の上小朝服して各船小中黒の花號ある白旗を建り位前鐮炮鎗捧眉
 尖刀を飾措て非常の為小士卒各二百名を將て俱小出て海上小あり其船都て武藏の方へ
 奔りて則墨田河を法會の始とせ第一日墨田河より西國河まで第二日西國河より科
 草澳まで是より將次第を追ふて七日新井の澳より洲崎小至りて結願とを船毎小衆
 二百名二六時中讀經の聲蠅々乎々蚊虻の群る如あの時陸あり施行のあり相摸の
 鎌倉より新井浦河まで大村大角堀内雜魚太郎頭人ぞて或の城下或の港口米錢許多々

積措て老兵士卒是小與る又假名川より高暖まで大阪毛野浦安牛助十代九圖書助等
 是を行小湊又小水門目鏡内葉四郎等小頭人より又大塚礪川の邊小森但一郎
 木曾三介西國河原の躰船員六東峰崩三小五十三太妻吉吉を副とせ又行徳より本所
 深川の犬田小文吾頭人まで満呂復五郎小頭人より石龜次團太越卿三等是小従ふ又國
 府臺より葛西龜越の犬飼現八頭人まで真間井樵二郎繼橋綿四郎是小従ふ潤就鳥手
 古内振照俱教二小頭人より又墨田河の西河原石濱の城の下小登桐山八郎頭人まで老兵士
 卒施行小與り従ふ者尠るむ又岡山の壘の頭人鳥山真人等も出て這り小與る者
 都這數箇所小積措れ米錢の猛可小山の出来像く斜奴あり檢鈔あり施
 行を人別小米一斗錢五百文と定めら女子と小兒の半の半分を取らるとい小夫役の莊
 客其地の村長等相従ふ者枚擧る小違あり小介程小去の年来軍後小疲れ果く
 家を喪ひ子を售書孛離散して餓渴不堪る他方の窮民乞見柵草見の老言を

扶け禱を披死或は赤子を駝敗囊を引提り陸續とく来ぬ者蠃児の甘たふ聚ふ
 が像く其米錢の多ゆと施さる東西亦過分胆を潰し感涙を流さむわり
 てと戦と拜むわりて徳を仰だ恩を謝し其米錢を賜りて還りやむり来ぬ者わり彼
 岸七日を涯りぬて施す吏の敢奉らむ受る者へ嗟来の怨も今戦世の暴虐の
 中ふ這活阿弥陀も在せ欬とて喜悅の聲洋々と耳ふ盈ざる日るりけり既を結
 願の目ふ做りしる大法師の施餓餓船を新井の澳に經續果て洲崎のさ漕漕と
 来ぬと隨從の二百余艘の相距と遠くば導師の船を圍繞しついで讀經の聲登り
 衆口の多かるも只一舌より如く細大音聲口調錯を其聲龍宮城を暢ふへ天
 衆も越ふ来向て這大法會を資するもく江河の鱗介波濤を閉れと菩提心を發せ
 らんと七箇日雨あぞこの日侍ふ海暖く虚空に蕭然の風をけし潮水平坦ふと
 眠鴻流まは幾群の和鳥俱ふ出ふ羽を斂め磯松の集る老鶴これが為ふ求漁らふ下

まの目相村の城内の里見義通御曹司舎弟の君次麻呂殿子と共侶ふ洲崎の浦に
 置れる望洋臺ふ出ぬへ両家老東辰相荒川清澄又姥雲代四郎白濱十郎朝夷三
 弥七浦二郎満呂再太郎安西就介磯崎増松等伴當り又十條左郎十條尺八
 胞兄弟はまの時堀内許より召せられ両君公達見奉るまのて扈從をて君邊在り
 年尚二五ふ足らねども最大大介やうるを人見と譽ぬるりけりまの折をて敵の
 敗將許我の成氏主并ふ両官領の子息憲房朝良朝寧千葉自胤を首ぬて
 稲戸由充三浦義同其子義武大石憲重長尾為景原胤久齋藤盛盛実等
 俘囚ふ做りてまの地ふ在る者も樹影散の為ふとく皆饒されぬとく左右の假屋ふ
 在り敬言固の士卒あふ多かり義通先諸の敗將ふ對面して礼平く親の誠心を
 舒傳ふるふ慇懃の詞を罄さるまの故ふ犬塚信乃大江親兵衛大川北莊介
 政木大全孝嗣等の義成主の命ふより船を洲崎の浦ふ返してまの日の待客使らり

當下朝良朝寧憲重の孝嗣を見く羞る色あり。孝嗣も亦去の折をひく。いま欲志を尋ねれども憚りあれば外々しく。管待を致すの程然る程夕陰西小斜みく。法會の讀經果一かば、大法師の身を起して舳頭する。餓饑架ふらち向ひり。香を焼水を賻け眼を閉合堂して舊臘八日水陸三所小戰歿する。自他の萬靈施主里見殿の所願ふよりて經亮讀誦の利益違へむ。往生得脱一蓮托生等見菩提と念下々且偈を唱る者五言四句其聲清亮ふく高けよ上の紫微有頂天ふ届るべく。下の金輪捺落まて。安んずまむと思ふ可ふ水と陸との衆人の愕然とらち驚く手心小感眼も逆み長視する當下、大阿耨多羅三藐三菩提の識算ある。數珠を取ら推搦又偈を唱へ章を誦し念佛十遍聲の中小數珠をうち揮りうち拂ふ。縦横之導の法力小奇しかる。識算の八の玉を串たり。數珠の緒弗と振断離られて

海へ交と入よと見へけ。那時邊一這時速一渦く潮水小波瀾逆立く百千萬の白小玉忽焉として立升る。白氣と俱小中天小沖りて宛衆星の。烏夜小晃く小異るるむ又其許の白小玉亦只數萬の金蓮金華と變と赫奕光明粲然没目と共小西小靡まき。搗銷ま如く見へるる隨小天の残る二藍の瑞雲の中小音樂吹えて暮果るまを奏々たり。今這奇特を自較せ者。義通主従犬士の毎。箱戸由充敵の敗將成氏憲房。朝良朝寧自胤のささ義同親子。憲重胤久為景盛實小至るまを俱小傲慢の角折れん。西敵戰死數萬の亡魂。技苦與樂の利益小遇へる。正小是里見の仁義と、大法師の大功徳小あはむと孰うのふべ死やと。感嘆敬服せざる。為小貌を改めていあく後悔まらけ。因く憶ふ小甕襲の玉の地水火風の四大あり。よく其風を發まふ及び兵鬪人をりて水陸する。大敵を對治

是其所用四大るるむ且始ハ八百比丘尼ハ獲られて風を起し善ふ
 災一後ハ毛野ガ八百八人の籌策を資けり。是八百の正對るるむ且阿
 耨多羅三藐三菩提の九言八箇の玉ハ變りてハ萬鬼を濟度の利益あり。
 恁まハ八犬八行の仁義の玉ハ伯仲モ初邪物を幫助ハ那宋人の不龜子の
 藥の比喩も似るべし。畢竟、大ガ水陸道場大施餓饑の本願成就
 まで後の話説甚麼ぞや。丹々又下の回ハ解分るハ聴ねかし。

作者云前も如く。本回ハ曩ハ腹稿のまゝ時全部百十二回ハ
 定め結局まゝの題目を措けハ今終るハ及びて題目外の話説るハ
 工紙治む故ハ本輯四十六の簡端ハ附録目數ハ條ハあり道節
 湯嶋ハ兩奸賊を擒ハ段里見の三陳凱旋衆議の段ハ照見るべし。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十七 終

